

京都部落問題 研究資料センター通信

第60号

発行日 2020年7月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2020年度 差別の歴史を考える連続講座

- 第1回 幕末の洪水対策と被差別民 —近年、解読の進む「今村家文書」から
10月2日（金） 講師：小林 ひろみさん（奈良県文化資源活用課会計年度任用職員）
富を蓄え、技能を磨き、幕末の洪水対策にも貢献した被差別民の姿を、京都近郊の村の庄屋文書から紹介します。
- 第2回 朝鮮通信使と「あの」絵図
10月9日（金） 講師：伊東 宗裕さん（佛教大学非常勤講師）
延享度の朝鮮通信使は淀城下を通過しました。淀での通信使応接を担当した淀藩士が描いた絵図が残っています。この絵図を細かに見ます。見る価値のある絵図です。
- 第3回 健常者とは誰か —「耳なし芳一」を読み解く
10月16日（金） 講師：広瀬 浩二郎さん（国立民族学博物館准教授）
なぜ琵琶法師や瞽女は日本社会から消滅したのでしょうか。怪談「耳なし芳一」を手がかりとして、盲目の宗教・芸能者が残した文化の現代的意義を考えます。
- 第4回 神輿場はなぜ荒れたのか —近代京都の祇園祭神輿渡御を中心に—
10月29日（木） 講師：中西 仁さん（立命館大学教員）
明治・大正期の京都の都市祭礼、特に神輿場では喧嘩、揉め事、騒動がしばしば起こりました。神輿昇たち（都市下層民衆）の生活や心性に注目しつつ、なぜ神輿場が荒れたのかを解明していきます。
- 第5回 全国水平社創立前の「差別糾弾闘争」 —京都・東七条の経験から—
11月6日（金） 講師：朝治 武さん（大阪人権博物館館長）
水平運動を象徴する基本的闘争形態は差別糾弾闘争ですが、全国水平社創立前にも類似した闘争があり、これを京都・東七条の経験から探ります。
- 第6回 近代京都の被差別部落と在日朝鮮人 —土木事業を中心に—
11月13日（金） 講師：高野 昭雄さん（大阪大谷大学教員）
錦林地区を中心に、京都の土木事業について戦前期を中心に論じます。

◇時間：午後6時30分～午後8時30分 ◇参加費：無料

◇場所：京都府部落解放センター4階ホール ◇事前申し込みが必要です

本の紹介

広瀬浩二郎著

『触常者として生きる』

琵琶を持たない琵琶法師の旅』

岸 博実

(京都府立盲学校非常勤講師)

ブラインドサッカーの開拓者にして、合気道にも通じた、気鋭の歴史研究者——私が広瀬さんを初めて知った頃のイメージはこうだった。二〇〇一年に国立民族学博物館（以下、民博）に職を得、博物館における（自分の居場所）を模索する試みに乗り出して、一歩分ずつ石を置いていくさなかだったと記憶する。

親密さが深まるきっかけとなったのは、二〇〇六年に開催された民博の企画展「さわる文字、さわる世界—触文化が創り出すユニバーサル・ミュージアム」であった。その展示に京都府立盲学校が所蔵する資料を提供することになった。準備のため、資料室の担当者として、盲啞院時代の教材・教具一点一点に（触りながら語りあう）広瀬さんとの時間を共にした。初期盲教育に点字が導入されるより前に製作された木刻凹凸文字や凸形

京街図などを巡って気づきに溢れた対話が忘れられない。

最近、拙宅の書架にある広瀬さんの単行本を発行年の順に並べ直してみた。二一世紀初頭の二〇年にわたる作品群ということになる。

01年『人間解放の福祉論—出口 王仁三郎と近代日本』

04年『触る門には福来たる 座頭市流フィールドワーカーが行く！』

07年『だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム—“つく”と“ひらく”の現場から』

09年『さわる文化への招待 触覚でみる手学問のすすめ』

12年『さわっておどろく！—点字・点図がひらく世界』・『さわって楽しむ博物館—ユニバーサル・ミュージアムの可能性』

体知の探究』・共編著『知のバリアフリー—「障害」で学びを拡げる』

15年『身体でみる異文化 目に見えないアメリカを描く』

16年『ひとが優しい博物館…ユニバーサル・ミュージアムの新展開』・共著『点字を発明した19世紀のフランス人 ルイ・ブライユ』

17年『目に見えない世界を歩く「全盲」のフィールドワーク』・編著『万人のための点字力入門—さわる文字から、さわる文化へ』

19年共著『知のスイッチ—「障害」からはじまるリベラルアーツ』

20年『触常者として生きる 琵琶を持たない琵琶法師の旅』

01年の『人間解放の福祉論—出口王仁三郎と近代日本』は、一九九〇年代の「宗教と盲人」の歴史に分け入る仕事の成果として生まれた論考。民博のスタッフ紹介欄にも、専門分野は「日本宗教史・民俗学（日本の新宗教・民俗宗教と障害者文化・福祉の関わりについての歴史・人類学的研究）」と記されている。一九九七年には『障害者の宗教民俗学』も上梓された。

一転、04年以後は「触る」（さわる）がキーワードとなり、書物のタイトルにも相次いで用いられている。民博を拠点として、博物館の在り方を考える立場に身を定めたとき、博物館が「見る」ためのものと扱われ、展示品に「触る」ことが許されない」というバリアをまず取り除き、さらに「誰にも開かれた博物館」へと歩を進める突破口がまさに（指先に触れた）のであろう。

手を変え品を変え—場や方法を探りながら—重ねられた経験を通して、単なるアクセシビリテイの確保で終わってはならず、「感覚の多様性を尊重する博物館」を具体化するのがユニバーサル・ミュージアム運動の要諦だという把握がくつきりと浮かびあがり、さらにその過程で障害当事者が果たす役割を問い深める——広瀬さんは、本書でこのように自身の営みを語っているが、この認識に到達するまでのいくつかのステップに相当するのが一連の「触る」（さわる）本だったと位置づけられよう。

二〇一〇年代半ばからの著作では、キーワードが「文化」「知」「アート」「世界」へと拡大していく。実践的なフィールドが博物館だけでなく「美術館」をも対象

に加えたことが背景にあった。『触常者として生きる』を読むと、「美術の鑑賞」だけでなく「作品づくり」「写真の作製」に広がっていることに気付く。さらに人間論にも思索が延ばされ、私たちが求めるべき社会像まで提言されていて、おおいに考えさせられる。

一読し終えて、この『触常者として生きる』には、広瀬さんによる俳句や詩がたくさん収められていることに改めて驚く。もともと本人曰くの「おやじギャグ」、漢字に同音異字があることを活かした造語をいくつも編み出してきた実績がある。言葉に寄せる関心が並々でないこと、駄ジャレとは一線を画したセンスで日本語を駆使できる人であったが、いよいよ感性と思想を詩歌に織り込んで展開してみせるという新しい境地に立ち至ったものと見受けられる。

さて、表題である。「触常者」という広瀬さんによる造語が初めて書籍のタイトルに採用された。「おわりに」によると、(過去の拙著のタイトルでは、「触常者」という言葉は、まだあまり一般には知られていないから)と、この語を用いることを避けてきた)のだという。(そろそろ、この造語で勝負してもいい時期な

のではないかと)と続く。実際には二〇〇九年頃から使われているので、講演やエッセイなどを通じて「触常者・見常者」が目や耳になじんでいるという読者も少なくないだろう。

広瀬さんが(僕の活動の原典である)とする『触常者宣言』は二〇〇九年に発せられた。ここに全文を紹介するゆとりはないので、「触常者とは『考える』人である」・「触常者とは『交わる』人である」・「触常者とは『耕す』人である」という三つの象徴的なフレーズをピックアップするに留めるが、触文化の魅力、(見常者)との交換、五感の可能性などがしなやかな勁い言葉として提言された。

序章において(「触常者宣言」は、「水平社宣言」に刺激されて生まれた)と打ち明けられているが、この「宣言」そのものに、名指しはされていないものの、日本ライトハウスを創立した岩橋武夫、京都ライトハウスを創立した鳥居篤治郎への簡潔な言及がある。岩橋は(光は闇より)と主張し、鳥居は(盲目は不自由なれど不幸にあらず)と語った。先人二人の業績に敬意を表したうえで、広瀬さんは(使命感、不自由からの決別を高らかに宣言しよう)と呼びか

ける。

私は、「触常者宣言」に初めて接したとき、新しい時代の訪れを感じたし、共感に浸った。鳥居たちの盲人運動をふまえつつ、新たな発信が始まることを喜んだ。その気持ちは今も変わらない。だが、少し言葉を添えてみたい。それは、鳥居は(不自由)の世界をかこつだけの人ではなかった。鳥居流と広瀬流の障害観・人間観は根っこで太くつながり合っているのではないかと。「水平社宣言」とほぼ同じ時期、一九二一年ごろに鳥居は「目なきよるこび」という文章を点字で書いて、当時勤めていた三重の盲啞学校で生徒に読ませたという。後に鳥居はそれを「盲目の宣言」と言い換えた。そこに宣言されている内容を拾い上げてみよう。

(残酷な自然は、私どもから五感の一つを奪いました。しかし、恵み深い彼女は、再び視覚の欠損を補うべく他の感覚を、発達させてくれました)・(私どもは、外から見る程、果して不幸な人間でしょうか)・(日の光の明るさを見ない私どもには、暗黒の恐ろしさと不安がありません。闇と光は、私どもにとつて一如であります)

「触常者宣言」が、視覚障害と

は(さまざまな意味での不自由(マインス)を抱え込まざるをえない苦境なのか)と問うことは的確だと、そう考える。だからこそ、「盲目の宣言」にその萌芽があったとも感じられてならない。「触常者宣言」は、「盲目の宣言」の否定の上に存するのではなく、「盲目の宣言」と同じベクトルに属し、それを飛躍・発展させるものであった(と、私は思う)。

副題は、「琵琶を持たない琵琶法師の旅」とある。04年には「座頭市」であった。二つをつないで、「座頭市から琵琶法師への変身」が遂げられたと例えるのは戯言だが、「琵琶を持たない琵琶法師」の含蓄はやはりこの本の要諦であろう。冒頭に、詩「琵琶なし芳一」を据えて、(人間はなぜ触角を失ってしまったのか)と問いかける。

「おわりに」では、(全身の触角(センサー)を駆使して逞しく生きる「琵琶なし芳一」は僕の中にも、読者各位の中にも眠っている)とエールされる。「琵琶を持たない琵琶法師」は、個人を指す自称ではなく、「眠っている」「野生の勘」を持つ人——いわゆる暗眼者や知的障害者も含むすべての人——を、「ともに旅に出よう」と誘っているわけだ。

〈本書の目的は障害理解ではない。「視覚を使わない」僕が、健常者たちに送るメッセージ集と受け止めてもらえれば幸いである〉とある。「琵琶を持たない琵琶法師」の一人として、私もこの旅路に出发しようとする時、途中で道を踏み外さないための指針となるだろう。

次に、表紙カバーの点字と点図について。「触図は見常者と触常者の双方向コミュニケーションのツールである」という広瀬さんの持論を受けとめるクリエーターの輪があり、「さわってみたくなる」触図へと結晶している。書名・著者名の他に何が描かれているかは、あえて書かないのが正答であろう。手に取った見常者はどうしても先に見てしまうことになりそうだが、表紙の側と裏表紙の側との（共通点と異なる部分）を触覚で感じ分けてみることをお奨めする。さらには、表紙全体を取り外して裏返し、真っ白な面に凹んだ点の並びを撫でたり目で確かめたりするのも一興に違いない。腰のある点で、触った感じがしっかりしている。紙の滑らかさ、強さも選り抜かれている。最近、少しずつ増えている点字・エンボス加工の施された表紙の中でも秀逸だと評したい。

今後への要望を述べるとすれば、絵画制作を再開した広瀬さん自身による触図にもお目にかかりたい、いや、ぜひお手にかかりたいと思う。（お手打ちになりたいといっているわけではない。）

本文のことに入る前に、もう一つ。本書末尾に「テキストデータ引換券」が付いている。購入を前提にしたものだが、「点字使用の方」などという特別扱いをせず「ご希望の方には」と伝えられている。ユニバーサルを唱えるに相應しい行き届きぶりだ。与えられた紙数の半分を過ぎてしまった。

序章・終章の他は、三つの部に分けられている。序章では、「野生の勘」と「未開の知」の語義が解説され、いわゆる健常者Aと障害者Bの「不等号」な関係（≠）が吟味されて、不等号の枠楕から解放へと達する。とはいえ、推理小説の解が暴露されているのは趣が異なる。三つの部のエッセンスは次のように開示されている。読みの海図として援けになるだろう。

第I部—文化人類学の立場から「障害」について多面的に考える（「野生の勘」を理解する学問的な基盤の提供）

第II部—博物館をフィールドと

する僕の研究成果をまとめる（「未開の知」を万人に開くための挑戦例）

第III部—二〇一八年の後半に『日本経済新聞』夕刊に連載したコラム（「野生の勘」を駆使して、「未開の知」を開拓しようとする全盲研究者の現在進行形の歩みの記録）（写真を使わない「射真集」）

以降は、インパクトの強かった語句や文章（要約）に即して紹介する。庭園の石を伝うような進み方になるため、広瀬さんの組み上げてきた体系を相対的に映しきれないことは詫びておきたい。

★人類史上、文字のない時代には「文字を使わない点で人々の間に差」はなかった。文字文化がもたらされて「使える人と使えない人」の区別が生まれた。みんなが「つるつる」に同等であったのが「ざらざら」の差別を内包する世界に陥ってしまった——丁寧にかみくだかれた言葉で、分かり易い。「つぶつぶ」の文字としての点字の意義についての補言があれば、現実との切り結びにいつそうの深みが生まれたかもしれない。

★盲学校は文字を使える自由を獲得するのみならず、視覚の束縛を離れ、聴覚や触覚をのびのびと活用できる学びの場だった——広

瀬さんの経験に基づく盲学校像である。私が担任した生徒の中にも、中学校までを貧弱な統合教育下で過ごしたために普通字も点字も身につけることができなかった生徒がいた。盲学校に移ってきて点字と出会い（僕の文字を確立できた）と打ち明けてくれたシーンを思い出す。

★琵琶法師・瞽女の芸能は、「聴き語り」。視覚を使わない強みが発揮され、音と声で森羅万象を表現した。視覚障害者が伝統的に従事してきた生業としての按摩は、触って体内を読むこと、それは「内界を探る眼」とも言える——宗教、弦楽器、鍼灸あん摩、塙保己一に代表される学問など、盲人の適職とされてきた分野は押しなべて（記憶力と言語力）と（手の触察力と操作力）を基盤に成り立った。この史実に関する広瀬さんの洞察に諸手を挙げて賛同する。

★民博の館長であった梅棹忠夫氏は『夜はまだあけぬか』を著した。その学識への敬意を強調したうえで、梅棹氏を「遅すぎた失明者」と呼び、広瀬さん自身の生きかたとの対比が行われる——その章末における（梅棹先生、「夜」はもうすぐあけますよ、きつと！）に込められた未来観がまぶしい。

★「合理的配慮」をめぐる、伊藤亜紗氏の『目の見えない人は世界をどう見ているのか』が話題にされている。世間の注目を浴びているこの本には「見る人・見られる人」を分ける発想があるので

はないか、そこにおいて、真の共感・協働は生まれるかと問いかけられている――が、視覚障害教育の場に長く居続けてきた私としては、〈特殊教育の関係者の一部が絶賛していること〉への疑問と不満が投げかけられているのを避けて通るべきではなからう。美学をベースにした伊藤氏の「目の見えない人は世界をどう見ているのか」の「発見」に、特殊教育の現場が言葉に紡ぎだせていなかった知見が含まれるのは否定しがたい。しかし、盲学校の場合でいえば、視覚に障害のある子どもなどの「生」と「権利」を尊重し、社会的インテグレーションの実現を目指してきた道のりを通して、「合理的配慮」の種を拾い上げ、「合理的配慮」の行く手を担いうる知恵を蓄えてきたことは少なくとも確認しておきたい。

★「耳なし芳一の話」は、耳（見えないもの）の時代から、目（見えるもの）の時代への移行を象徴する文学作品だと措定されて

いる――論旨に説得力を感じたが、新たに持ち出された言葉「耳立」と「利く fortune」の定義が私にはやや分かりづらく、さらに立ち入った展開に期待したい。

★「目の不自由な方を見かけたら、声をかけましょう」という駅のアナウンスに関して、弱さを認め、健常者に助けを求めらうことの大切さを押さえつつ、「しっかりと歩行スキルを磨こう」「触角を駆使して野生の勘で欄干のない橋を渡ってやろう」こんな意見が当事者から出てこない現状に、僕は危機感を抱いているとも吐露されている――一〇〇年ほど前に京都市立盲啞院を卒業した点字ユーザー小野兼次郎（反軍運動に参加して逮捕された、近代日本で最初に社会革新運動に参加した盲人）は、〈二、三度つれて行ってもらえば、どこにでも一人で行ける〉旨、書き残した。戦前に『盲人歩行論』を刊行した盲目の木下和三郎も安全な歩き方を見出した。橋のない欄干とも例えられるプラットホームでの事故を防ぐために、転落防止柵の全駅配備などが急がれるが、個々の知覚と技法を磨く必要があるのも否定すべきでない。

★DID・暗闇レストランの話
題、写真から射真へ（世間の「心眼」

観念への疑問、反発。「射真」の心得――写すのでなく射る意識、手・耳・鼻などで一点に集中すること）、点で描く触角マンガ：どの切り口も、読む者をどきどき・わくわくさせる。

★「あいまいな日本の弱視」では、「準盲・半盲からロービジョン」へとネーミングが移ってきた弱視者の特質と存在意義が考察される。「涉外者」という新語に込められたものを読み解き、実践に活かしていきたい。

★触文化とは、博物館を考えるなかで生まれた新概念、さわる文化である。視覚障害者の美術鑑賞を疑似体験するものではなく、触覚を頼りに、物にじっくりさわって「目に見えない世界」を想像すること――障害の「有・無」を下敷きにした不平等を乗り越えるとはこういうこと。注意深く読み取っていく必要がある。

★学習漫画『レイ・ブライユ』（伝記）の表紙に描いた三色旗は、自由・平等・友愛を色に置き換えるのではなく、触覚的に表せばどうなるかで手ざわりを選んだ。さわるセンスを磨くツールと捉えてほしい。二〇一五年度採用の小学四年生の国語教科書（学校図書）に「さわっておどろく」が掲載され

た。「頑張っている人でもなければ、かわいそうな人でもない。障害者とは、おもしろい人である」。晴眼者が見落としていること、見忘れていたものを視覚障害者が「発見」するケースも珍しくない――博物館や美術館の敷地内から、学習漫画や教科書というフィールドへの進出が、二〇一〇年代の特長とも言える。視覚を使わない自由！このフレーズがフレッシュだ。子どもたち、次世代へのバトンが試みられている。

★ユニバーサルミュージアムの新しい課題は、雇用・就労問題。おそらく視覚障害者の学芸員は皆無だろう――これが具体的な課題として意識されるまでに二〇年及以上熱心な運動が状況を変えてきた。主題は当事者の役割だ。現在は、肯定する人が少ないが、見えない人が見えない人の歩行訓練を行うという新機軸が求められているとは、私の持論である。「障害者だからこそでできること」を探究し尽くしたい。

★偏差値からの脱却――知的障害者との協働の意義――彦根学園での経験。「比べる」手法が通用しなかった。ひたすら自己の内面に触角（センサー）を伸ばし、制作に没頭する人々がいる！「知る者・

知らない者の間の壁を取り壊し、人と人のコミュニケーションのあり方を他覚的にとらえ直すのが、無視覚流の最終ゴールだ——視覚障害を問うだけでなく、ここでもチャレンジが広がりを見せる。

★副触図。視覚障害者がどうやって二次元の絵画作品を鑑賞するのかが、避けられない課題としてクローズアップされるようになった。広瀬さんは、視覚芸術に新たな魅力を付与する（副える）ことを意図して、美術鑑賞で使われる触図を「副触図」と名付けている——実は、日本点字を生かして盲学校用の点字教科書が作られるようになって一〇〇年以上経つが、美術の教科書だけは未だ点字版が用意されていない。この状況を打開する方向性も鮮やかに摘出されている。

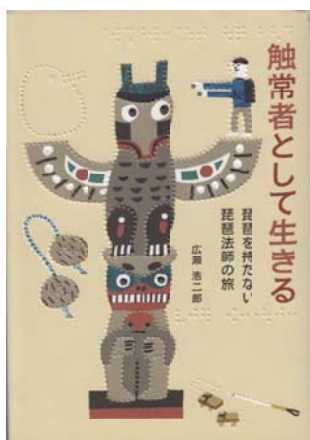
第三部は、射真集「我が半年」として、二〇一八年七月〜一二月の『日本経済新聞』の連載二六編で成っている。「三本足の役割」「災害弱者は復興強者」「独断的サンドイッチ論」「手は口ほどに物を言う」「長くもなく短くもなく」「縄文ウオーク」などをお奨めしたい。終章の『盲人と海』にはドラマ性もある。締めくくるにあたり、いくつか補言しておきたい。

一つ。広瀬さんの著作のタイトルを通覧すると、ほぼ例外なく副題が添えられている。「触常者」が多くの読者に浸透することを通して、副題なしの「広瀬本」が大ベストセラーになる時代を切望したい。

二つ。触常者・見常者という用語は、①いつ国語辞典に載るのだろうか？②どのようなにして人類の共通意識に高めていけるのだろうか。そのために、同音を生かした英語訳はどのように考えられていくのだろうか。

三つ。琵琶法師の登場は、座頭市からの変身であるとともに、歴史研究への回帰も予感させる。

そして、なによりかにより、広瀬さん、食常者同土として、佳き日を選び、また一夕（二席）を共にしようではありませんか！（伏流社刊、二〇二〇年一月、一四〇〇円＋税）



本の紹介

馬部隆弘著

『椿井文書——日本最大級の偽文書』

渡辺 毅

（穀雨企画室代表）

絵空事師。

そんな言葉はないと思うが、野坂昭如が小説に登場させた「エロ事師」に語感が似ている。だからあえて用いたい。絵空事師。

近世後期、南山城を拠点に多数の偽文書を創作した椿井政隆なる人物に、じつにふさわしい呼び名ではあるまいか。

ありもしない中世文書をあつたこととして、それを自らが書き写したのだと称し、数多くの文書・絵図の類いを捏造した。こうして「椿井文書」と後に呼ばれる壮大な絵空事の伽藍を築き上げた。嘘をまことと信じたくなる仕掛けを巧みに張り巡らすことで、一つの絵空事は信憑性を増す。後世の歴史学者の中には、椿井政隆の絵空事を信じて自らの学術論文に引用した者も少なくない。魅入られる人が出てきても不思議はない。

い。（絵空事は所詮絵空事。嘘は嘘。嘘がまかり通るのを看過するわけにはいかない）と、歴史学者のまっとうな使命感に衝き動かされ、あるいは衝き動かされたふりをして、椿井文書の嘘をひたすら明らかにしようとしながら、要するに椿井政隆に魅入られてしまった人がいる。馬部隆弘さん。本人が云っている。「椿井文書と椿井政隆に対する私の愛情は、他のどのファンにも負けないはず」。そんなわけだから、馬部さんがその著書『椿井文書——日本最大級の偽文書』の中で虚偽を暴けば暴くほど、椿井政隆の絵空事師ぶりは際立っていく。

大阪府枚方市にある津田山。この山の支配権を巡り、江戸期、麓の津田村と穂谷村が争った。鎌倉期以来、津田山周辺は津田郷と呼ばれ、氏神は三之宮神社。開発に

より山間部の穂谷村などの集落が生まれるが、神社の祭祀を取り仕切るのはいくまで本村の津田村である。山の支配権が津田村にあるのは明白であった。ところが、郷内に集落が次々と生まれる過程でいつしか三之宮神社は穂谷村内に立地する恰好となる。ここから穂谷村が津田山支配権を主張するようになって争論が生じた。形勢は津田村絶対有利。それでも津田村側は、より有利な立場を固めるために、津田村の豪族津田氏が室町期に津田山に城を築いて居城にしたとする文書をでっち上げた。とんだ絵空事。これがまんまと京都町奉行所の評定で事実認定された。津田山に城の遺構らしきものがあつたから。じつは山岳寺院の遺構らしいのだが。ともあれ争論はいったん決着。と同時に、津田城はあたたかも実在したかのように後世に語り継がれることとなる。

穂谷村では唐突な津田城の出現に納得がいかない。そこで新たな主張を展開し始める。

穂谷村には氷室があつた。朝廷のための氷蔵庫である氷室が、千年も昔に設けられた。だから穂谷こそが由緒正しい地域の中核、という主張。なるほどれっきとした

歴史書に、平安期の初め、北河内に氷室を造つたとの記述がある。どこと具体的に書いてはいないが、それが他でもない穂谷村なのだ、という主張。穂谷の村人が突然云い出したことである。ところが、この主張を裏付ける文書が降って湧いたように出現した。『氷室本郷穂谷来因之紀』。室町後期に興福寺が氷室の由来を承認した文書で、責任者の花押もしっかり添えられている。

ある日。と、以下は私の我流の絵空事。

人品卑しからぬ道士然とした男が穂谷村を訪ねてきた。「私の手許にこのような文書があり、書き写しましたが、もしやお役に立つのではあるまいかと持参いたしました」。穂谷の人びとは訝しむ。だが示された『氷室本郷穂谷来因之紀』を閲して驚喜する。「穂谷に氷室はほんまにあつたんや！興福寺さんのお墨付きも得とるやんけ！」。村名主が「これ、わしらに譲ってくれるんてつか？」と訊くと、男はうなづいた。「無論。ただし丹精して書写したものであり、手間賃と云つては何ですが、寸志なりと頂戴できれば……」。

日を経ずして男は再びやって来

た。「葛籠の中からこんなもの出てまいりました」。示されたのは『氷室郷惣社穂谷三之宮大明神年表録』。村人再びの狂喜。津田郷惣社の三之宮神社は穂谷の神社だと明記してある。よっしゃ、これで津田村の連中の鼻を明かしてやれる。「これも譲っておくれやっしゃ。もちろん、御礼はさしてもらいま！」。

道士然とした男は謝礼金を懐に納め、村人に見送られて穂谷を去つた。二つの文書は偽文書。書かれた中身は絵空事。そうと知っていた弟子筋の若者が付き従っていた。若者は小声で訊く。「椿井先生。なぜ穂谷村に肩入れされるのですか？」。

男は椿井政隆。恬淡とした表情を泛べたまま云う。「争論の噂を耳にした時、津田村の津田城が絵空事だとすぐに判りました。絵空事でも奉行所が認めたというのですからなかなかのものですよ。だから私は、まあ、向こうを張つてみたくなつたのですよ。穂谷に肩入れしたわけではありませぬ。それが証拠にほら」。袖から巻物様のものを取り出し、「こんな物も手に入れました」。

「これは系図、ですか？」。

「西村という家の系図です。葛籠から偶然出てきました」。偶然だなんて、先生……。「そういうことしておきましょう。西村家は津田村の名家です」。津田村の？。「これから津田村の西村家を訪ねます。由緒ある家柄であることを証す系図ですから、見せれば欲しがるのではないかと思うのです」。椿井政隆はほくそ笑み、悠々とした足どりで、穂谷村から津田村へ、坂道を下つてゆく。

「椿井政隆は謎多き人物である」と馬部さんは書いています。そして、「現時点で判明している彼の略歴」のあれやこれやを連ねる。

あれやこれや、なんて云い方が失礼なのは承知の上だが、何しろ馬部さんは歴史学者。その書きぶりは典拠を示して云々、典拠と典拠を比較して云々、と学者ならではの精確さに囚われている。囚われている、というのも失礼な云い方か。とにかく門外漢の私には、あれやこれやが七面倒くさく思えてくる。率直に云つて、馬部さんの論考を正攻法で紹介しようとするの間違いを犯しそうで怖い。ちゃんと読んでください、私はそんなこと述べていません、と云わ

れそうで怖い。だからあらかじめ弁解しておきたくなる。読み違があるかもしれないがご容赦を、馬部さんごひいきの絵空事師を、我流の絵空事をまじえて勝手に紹介しますからご容赦を。

弁解して少しすっきりした。政隆自らが作成し子孫が補ったと思われる椿井家の系図がある。これによれば、孝安天皇の第一皇子が大和国平群郡に住んだことに始まる平群姓の一族だそうである。現在の奈良県平群町椿井に居所があったので椿井を名乗り、それが戦国期に山城国相楽郡に居城を構え、当地を椿井と改名したのだとか。

孝安天皇は、記紀に登場はするが何をしたのか判然せず、そのくせ在位が百年余に及ぶ第六代天皇。それがご先祖だなんて怪しい。胡散臭い。とは思いますが、系図なんてそもそも胡散臭い。私も、わが家に系図こそ残ってはいないが、ご先祖は平安期の頼光四天王の一人、渡辺綱だと云われてきた。歴史上の渡辺の中で最も有名な綱をご先祖様だとしておけば箔が付く。それだけのことである。だから椿井が孝安天皇の末裔と称してどこが悪い。馬部さんもそのことを責め

てはいない。

ただし、歴史学者の馬部さんは江戸初期に編纂された『寛永諸家系図伝』という別の典拠もちゃんと示している。そこには椿井家初代は戦国期の人物で藤原姓、とある。こっちの史料のほうが、政隆の手になると思しき系図よりも断然信用性が高いと見えて、馬部さんは「近世のいつかの段階で、山城国の椿井氏が藤原姓から大和出身の平群姓に改変したことを想定できよう」と述べている。

平群姓だとするほうの系図によれば、政隆は明和七年（一七七〇年）に生まれ、天保八年（一八三八年）に六十八歳で卒している。文政二年（一八一九年）には江州で体長十余丈の大蛇を斬り殺したとある。馬部さんが調べた別の史料のあれやこれやによれば、国学や有職故実等に通じていたらしい。大蛇退治は、それなりに大きな蛇を叩き殺した事実はあったかもしれない。かなり長めの蛇を退治したことを自慢したくて、つい十余丈と吹聴してしまったのか。もつとも十余丈と云えば約三十メートル。あるいは退治したのは大蛇ではなく、例えば山中で頑丈に絡まり合う大樹の根っこに行く手を阻

まれて、これを伐り払う際の悪戦苦闘が、政隆の内部で大蛇退治に変異したのかもしれない。

いづれにせよ絵空事である。ただし、大蛇退治も孝安天皇の末裔だと云うのも、自己顕示欲の発露と云っていい大法螺で、誰が見ても明らかに絵空事だと判る。政隆が椿井文書に結実させた数々の絵空事とは種類が違う。

政隆のたたまは道士然としていた。どこにもそう記されてはいるが、馬部さんの叙述を通じて、恬淡として物静かな政隆の面影が私の中に勝手に造形されている。日ごろは部屋に籠もって偽書の作成に偏執的に取り組み、現実と見紛うような絵空事を丹精こめて創り出している。そしてそれを、たまに売りに行く。けれども、金儲けのためにしていることではない、と政隆は云うに違いない。「それ相応の労力がかかるのです。ときに応分の対価を欲したとしても、愧ずべきことではないと思えますが、いかがかな？」

椿井政隆と弟子筋の若者は日昏

れ前、津田村に入った。再びの、私の我流の絵空事。

西村家を訪ね、案内を乞う。「御家中の家宝にもなるうかと思われる貴重な品を偶然手に入れたので、持参いたしました」。

二人は招じ入れられ、西村家当主と対坐した。当主は、政隆の風体に学問をする人の気品を感じ取ってか、鄭重に訊ねる。「して、貴重な品とは？」「これでござる」と、政隆は巻物をうやうやしく差し出した。「おっ、これは……」「御家の系図ではあるまいかと思ひまして。相違ござらぬか？」。

「いかにもこれは当家の……」。系図を捧げ持つ当主の手が震えている。弟子筋の若者が横合いから覗き込むと、こんな記載が目に入った。「西村莊司三郎 永禄十丁卯年正月穂谷住士上武伊賀守清繁津田城押寄之刻、津田主水助加勢防戦、在勇功……」。

若者は思わず歎息を洩らす。室町末期、永禄の頃、津田城を穂谷村勢が攻め、城主の津田氏の許へ馳せ参じた西村家の先祖がこれを防いだ、というのである。政隆自ら「絵空事」と断じたはずの津田城の事績。それを巧みに採り込んで捏造された系図。

捏造？ 西村家当主はむろんそんなことには気づかない。表情にはみるみる喜色が泛んでゆく。西村家は津田村の名家なのだと、歴史的にはつきりと証拠立てる系図が、いま目の前にある。この系図があれば、津田村における西村家の地位は、ますます揺るぎないものになることだろう。ああ、喉から手が出るほど欲しい……。

若者は政隆にちらりと目線を送った。恬淡とした様子を崩さないが、心の中では、してやったり、と思っ
ているに違いない。(それにしても、穂谷村がこれを知ったら……)。
穂谷の人びとは椿井先生を、津田村の鼻を明かす好機をもたらし
てくれた恩人と感じている。その
同じ椿井先生が時を置かず、今度
はよりによって津田村へ、穂谷村
にしてみれば禁忌に等しい津田城
の事績まで記した系図を届けたと
知ったら。しかもそこには穂谷村
勢が、津田城を攻めた悪役のよう
にも書かれているのである。「先
生、あんまりでっせ。先生はうち
らの味方とちごたんか？」と、穂
谷村の名主は非難するかもしれな
い。だがそうなったら椿井先生は、
恬淡とした表情を少しも崩さず、
こんなふう云うに違いない。

「私はたまたま手に入れた文書をご縁のある方たちの許へお届けしたまで。古い文書がそれぞれの土地で活かされるのを望んでおるだけ。どちらの味方だとか、私には一切関わりのないことです」。

系図は当主の手に渡り、椿井政隆は応分の謝礼を得た。二人は酒肴のもてなしを受け、晩は当主の計らいで、西村家の別棟に泊めてもらうこととなった。

津田村の夜は深々と静まり返っている。暗い行燈の灯が、珍しく深酒した政隆の緩んだ面差しを泛び上がらせている。

「先生」。そんな政隆に、若者が声をかけた。若者には気になることがあった。「先ほど系図をちらつと拝見しましたが、道俊、という名が見えたように思ったのです」。「ああ、道俊」。「あれは『王仁墳廟来朝紀』を著した道俊でしょうか?」。「おそらくそうでしょう。それが何か?」。酔い心地の政隆の返答はものうい。
「いえ、だとすれば、先生が西村家系図に『王仁墳廟来朝紀』の道俊を組み込まれた意図はどのあたりにあったのかと、いささか気になったもので……」。ふと政隆は、横坐りの姿勢を正す。そして「タ

カヒロ殿」と呼びかけた。

「タカヒロ殿。なるほど貴殿は、私が何をしておるかご存知だ。けれども、私がしていることは私がしたのではないことになっている。それもまたご存知のはず。ここは別棟とはいえ、西村の家人がどこで耳をそばだてていないとも限らぬ。物云いにはくれぐれもお気をつけただきたい。よろしいか?」。

そう云われてしまうと、タカヒロ殿と呼ばれた若者は黙るしかない。しばし黙し、蚊の鳴くような小声で「失礼いたしました……」。

政隆は微笑み、また少し坐を崩して、「そのことはもうよろしい」と云ってから、打ち解けた調子で「それにしてもタカヒロ殿は『王仁墳廟来朝紀』のような文書もご存じなのですね」。「はい。じつは藤阪村の王仁墓には関心があり、道俊が著した『来朝紀』も一読しましたもので……」。「そうでしたか」。

「鬼墓などと呼ばれていた粗末な石が、じつは応神帝の御代に百濟から渡来した王仁博士の墳墓だった、という事実を、私は最初、並河誠所先生の『五畿内志』で知ったのです」。「ほお、並河先生の……」。並河誠所は政隆よりも一世紀前

の時代を生きた国学者である。畿内の式内社を比定する作業などに取り組み、これを『五畿内志』にまとめた。じつは政隆、並河が比定に至らなかった式内社を別の文書を偽造することで比定し、『五畿内志』を補完する仕事をしてきた。つまり並河誠所には縁がある。

「並河先生は、道俊の『来朝紀』を読んであの石を王仁の墓と確信されたそうです。私も『来朝紀』を読み、並河先生が確信されたのもつとも、と納得いたしました」。

「そうでしたか……」。若者の話を聴く政隆の顔に、得意のほくそ笑みが広がってゆく。タカヒロは、私のしてきたことを何もかも知っているわけではないのだな。『王仁墳廟来朝紀』を道俊作と信じきっているようだが、あれは私が創ったのだ。私が創り、江戸期初めの道俊という坊主が書いたように見せかけ、それを私が生まれるより前に並河誠所が読んだことにして、しかも並河は『来朝紀』を根拠に『五畿内志』の王仁墓のくだりを書いたのだと、そんな話までそれとなく広まるように仕向けたのだ。つまりはすべて私の絵空事。系図に道俊をさりげなく潜り込ませたのも、西村家が『来朝紀』の道

俊は我が家の先祖ですぞ」などと嬉々として吹聴することまで見越した上での、絵空事をまことらしくする、手の込んだ仕掛けの一つなのだ。

ほくそ笑みは顔全体に広がり、政隆は酔った勢いで、珍しく若者をからかってみたくなった。「並河先生も『王仁墳廟来朝紀』をご覧になるは、ひとかたならぬご苦労があったことでしょう」。「あの文書が入手にくい事情でもあったのですか？」。

「そんなところですよ。並河先生は、たいむすりつぶでもしてこつちへ来ない限り、『来朝紀』を手にすることはできなかった」。

失敬。江戸後期の人が、いかに絵空事師とはいえ「たいむすりつぶ」などと云うはずはない。だが江戸後期の日本人が時空を超えて移動する超常現象をどう表現していたのが判らない。だから失敬、「たいむすりつぶ」。

タカヒロ殿は狐につままれた顔をしている。もつとも、実際にたいむすりつぶしたのはタカヒロ殿その人かもしれない。稀代の絵空事師に接近すべく時空を超えた、馬部タカヒロ殿(?)。

椿井政隆は、現実と見紛うような絵空事を創り出すことに腐心した。じつは私も、まことしやかな物語を編み出したがる人間である。政隆には親近感を覚える。

考えてみれば、私は椿井政隆のツの字も知らず、親近感など抱きようがなかった。ところが馬部さんによってその存在を知らされ、絵空事を人びとに信じ込ませる椿井の手際をなるほどと思い、たいした絵空事師と感じ入った。馬部さんのおかげである。

私に与えられた紙幅は、我流の絵空事に費やしすぎて、もはや尽きかけている。椿井政隆のたいした絵空事師ぶりはまだまだこんなものじゃない。政隆の絵空事最高傑作『興福寺官務牒疏』。湖南市の西応寺に教育委員会が巨大な陶板プレートに仕立てて設置した「円満山少菩提寺四至封疆之絵図」。

多くの自治体史にいまだまことしやかに引用されたままの系図、絵図、社寺の由緒を記した文書、その他諸々。絵空事の広がった範囲は、南山城を中心に、近江、河内、大和、近畿一円。本書の読者には、椿井政隆が築き上げた絵空事の大伽藍を、ぜひ堪能してもらいたい。ただし繰り返すが、馬部さんの筆

致は歴史学者ならではの精確さを旨としている。門外漢にはやや七面倒くさい。

馬部さんは椿井政隆ファンなので、政隆のことはどこかで赦している。問題なのは騙した政隆よりも騙されてきた人びと、と云いたいのだろう。馬部さんは絵空事師ではなく歴史学者。歴史学者は騙されない。たぶん、それは馬部さんの矜持である。だからこそ、椿井文書にやすやすと騙されてきた歴史学者たちに、(あなたたちはこういう手口で騙されてきたんですよ)と忠告したいのだろう。

ところが、判っていても、騙されているほうが都合だから絵空事をあえて信じ続けようとする人たちもいる。王仁墓周辺の人びとは、古代渡来人の墓を日韓交流の象徴と位置づけてきた。今さらあれは墓でなくただの石でした、とは云えない。厄介なことだ、と馬部さんは苦虫を噛みつぶしている。べつに構わないのでは? と私は気楽に考えてしまう。どうせ大昔のことなんか正確に判りっこない。絵空事を信じたふりして楽しむくらい構わないのでは? そんなことでは歴史学者にはなれませんよ、と馬部さんに云われるかも

しれないが、私は歴史学者になるつもりはない。

だがちよつと待て。ふと私は考え込む。

私が生きている現代社会にも嘘は横行している。その嘘のすべてを、絵空事として許容していいものか。政府が公文書を改竄する。改竄された文書の中身は絵空事だが、それを許していいものか。排外主義者の罵詈雑言は絵空事で塗り固められているが、どうせ絵空事だからとほったらかしにしているいいものか。いいわけがない。とすると、椿井政隆の絵空事について、歴史学者ではないからと云って、ただ面白がっているものか。難しい問題のような気がしてきた。

(中央公論新社刊、二〇二〇年三月、中公新書、九〇〇円+税)



別事例判例集』 新たな差別禁止法を求める立法事実として 櫻庭総

部落解放 789 (解放出版社刊, 2020.5) : 600円

特集 学級・集団づくりの今日的意義と方法

本の紹介 川口泰司『ネット時代の部落差別—差別扇動とネット対策』 方寿

座談会 英語圏における部落問題研究のいま イアン・ニアリー, 黒川みどり, 寺木伸明

インタビュー 江戸時代を科学してきて思うこと 皮革製品をはじめとする近世日本の職人技術と、時代自体の再評価を 澤田平, 聞き手=足立須香

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 41 第4部 江戸時代と明治初期の部落問題 第4章 解放令反対—探 川元祥一

部落解放 790 (解放出版社刊, 2020.6) : 600円

特集 大阪のまちづくりと1地区・1社会的起業の取り組み あらためて「京都朝鮮学校襲撃事件」とは何だったのか 朴貞任オモニ会会長(当時)に聞く 中村一成

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 42 まとめ 1 キヨメから穢へ—動物供儀 川元祥一

部落解放 791 (解放出版社刊, 2020.7) : 600円

特集 メディアと部落

鼎談 メディアは部落の何を伝えるべきか ドキュメンタリー映画『ある精肉店のはなし』から考える 額瀨あや, 太田恭治, 杉本真一/バリバラ「BLACK in BURAKU」はなにを描いたか 森下光泰/僕がなぜ「“部落”ってナニ?」という番組を作ったか 鎮目博道/部落差別と「差別語」を考える 新聞メディアの現場から 鈴木英生/大手出版社の異物たらん 差別と向き合ったある編集者の軌跡 和賀正樹

本の紹介

鎌田遵『癒やされぬアメリカ先住民社会を生きる』

岡本工介/鎌田慧『叛逆老人は死なず』 日野範之

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 43 まとめ 2 ハフリ・屠者はキヨメだった 川元祥一

部落問題研究 232 (部落問題研究所刊, 2020.3) : 1,058円

近世の行倒片付、旅人病人対策の法的展開—広島藩の場合— 藤本清二郎

村方文書からみた四国遍路への対応—国元・宿泊・費用— 町田哲

近世社会の疫病罹患者の忌避と救済—紀州藩領尾鷲組における「疱瘡」を事例として— 酒井亜希子

書評

猪飼隆明著『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』—ハンセン病問題における自治の位置: 同書第二部をめぐって— 松岡弘之/吉見義明著『買春する帝国—日本軍「慰安婦」問題の基底』 人見佐知子

部落問題研究 233 (部落問題研究所刊, 2020.5) : 2,083円

第57回部落問題研究者全国集会報告

全体会 二一世紀の天皇制度を如何に捉えるのか? 宮地

正人

歴史1分科会

近世芸備地方の移動と行き倒れ(病人・死人)—19世紀の生存・救済 藤本清二郎/近世の行き倒れへの着目と課題—四国遍路研究の立場から— 町田哲

歴史2分科会

大阪府方面委員制度の歴史的格 飯田直樹/飯田報告へのコメント: 大阪府方面委員制度の歴史的格をめぐって 高岡裕之

現状分析・理論分科会

地域で暮らし続けるということ—福祉実践における住まいの問題 松本聡子/神戸時代の賀川豊彦と部落問題 鳥飼慶陽

教育分科会

中学校道徳教科書と道徳にかかわって—歴史の主体として生きる道徳性をめぐって— 大八木賢治/人権教育に関する指導方針について—文部科学省・調査研究会議「第三次とりまとめ」の検討— 梅田修

思想・文化分科会

『奴隷』『工場』を読む—いかにして一個の自覚した労働者たりうるか— 秦重雄/細井和喜蔵『奴隷』『工場』再刊の経過と反響 松本満

本願寺史料研究所報 58 (本願寺史料研究所刊, 2020.3)

近世の本願寺、その日その日 左右田昌幸

むこうにみえるは 17 (人権ネットワーク・ウェブ21刊, 2020.3)

国勢調査小地域集計から見る改進黨地区 1 講師 妻木進吾

ゆいばる 37 (姫路市人権啓発センター刊, 2020.5)

企業人権教育研修会講演会から「寝た子」はネットで起こされる!—ネット社会と部落差別の現実— 川口泰司さん

リベラシオン 178 (福岡県人権研究所刊, 2020.6) : 1,000円

柴田啓蔵作詞・解放歌の変遷—柴田資料・「水平新聞」・「水平月報」・「解放新聞」などを中心として— 柴田啓蔵プロジェクト(森山沾一・和智俊幸・横田司)

図書紹介 福岡市史編集委員会『新修福岡市史 資料編近世3—町と寺社—』 関儀久

小学校での部落史学習の現状と取り組みの方向 6 迫本幸二

川向秀武氏の教育への「問い」とライフストーリー 2—大学・大学院期と同和教育との出会い— 板山勝樹

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 38 「ひえもんとり」の周辺 5 石瀧豊美

和歌山研究所通信 68 (和歌山人権研究所刊, 2020.5)

第20回和歌山・人権啓発研究集会実施報告

講演1 朝鮮学校で学ぶ子ども達の教育への権利の現状と課題—高校無償化法除外、自治体の補助金停止、ヘイトスピーチ等を通して— 丹羽雅雄/講演2 琉球差別の歴史と現在 松島泰勝/鼎談 西光万吉先生没後50年を迎えて我々が学ぶべきこと 加藤昌彦, 日野範之, 小笠原正仁

対談：土肥いつきさん・田中一步さん

振興会通信 151 (同和教育振興会刊, 2020.3)

同朋運動史の窓 57 左右田昌幸

振興会通信 152 (同和教育振興会刊, 2020.5)

同朋運動史の窓 58 左右田昌幸

真宗 1394 (真宗大谷派宗務所刊, 2020.5) : 250円

「是旃陀羅」問題に関する懇談会 但馬弘, 藤井慈等,
黒田進, 片山寛隆, 楠信生

信州農村開発史研究所報 151 (信州農村開発史研究所刊, 2020.3)

「戌の満水」による上畑村の被災 斎藤洋一

水平社博物館研究紀要 22 (水平社博物館刊, 2020.3) :
1,000円

高松結婚差別裁判糾弾闘争を研究するための第一級史料
—『高松地方裁判所検事局差別事件／闘争日誌』の紹介
にあたって 山下隆章

史料紹介 高松地方裁判所検事局差別事件／闘争日誌

月刊ステイグマ 285 (千葉県人権センター刊, 2020.4)

香取市・被差別部落の歴史 坂井康人

地域と人権京都 810 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.4.1) : 150円

『竹田の歴史』17 中川正照

地域と人権京都 811 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.4.15) : 150円

『竹田の歴史』18 中川正照

地域と人権京都 812 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.5.1) : 150円

『竹田の歴史』19 竹田の子守歌 中川正照

地域と人権京都 813 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.5.15) : 150円

『竹田の歴史』20 自治会再建の提言 中川正照

地域と人権京都 814 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.6.1) : 150円

『竹田の歴史』終 竹田の未来 中川正照

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 1 川部昇

地域と人権京都 815 (京都地域人権運動連合会刊, 20
20.6.15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 2 川部昇

であい 696 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.3) : 1
60円

人権文化を拓く 267 「現代的」な差別意識とインター
ネット 辻大介

であい 697 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.4) : 1
60円

問題の所在はどこか? L/G/B/Ts の子どもたちが問いか
けるもの 土肥いつき

人権文化を拓く 269 学校現場でのジェンダー・セクシュ
アリティ学習の必要性 仲岡しゅん

であい 698 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.5) : 1
60円

人権文化を拓く 270 ジンケンとCOVID-19 中山千夏

同和教育論究 41 (同和教育振興会刊, 2020.3) : 1,50

0円

解題「『同和地区』における真宗事情調査報告」 伯水
永雄

史料紹介 近世真宗差別問題史料 13—土佐国被差別寺院
史に向けて 史料紹介 留役所「土佐諸記」と長御殿「土
佐国諸記」— 左右田昌幸

『講座同朋運動』(全五巻)の発刊を終えて 藤満智徳

[奈良県立同和問題関係史料センター]研究紀要 24
(奈良県教育委員会刊, 2020.3)

浦上キリシタンの配流と郡山 谷山正道

高山の鳥居前に皮を干す—中世奈良辺の宿者の一考察—
山村雅史

中世声聞師と新浄土寺銭湯 竹田祥子

神功皇后陵、日葉酢媛陵と地域社会 竹中緑

史料紹介 多様な被差別民の祝銭受納 奥本武裕

奈良人権部落解放研究所紀要 38 (奈良人権部落解放
研究所刊, 2020.3) : 1,000円

仲哀天皇・神功皇后・応神天皇論(序説1) 辻本正教

衡平社が登場する『野人時代』の歴史世界 朝治武

第46回奈良県人権・部落解放研究集会全体会基調講演

「ひきこもりと対話実践」 斎藤環

奈良人権部落解放研究所研究紀要総目次

日本史研究 691 (日本史研究会刊, 2020.3) : 900円

皮革生産賤視観の発生 小倉慈司

花園大学人権教育研究センター報 37 (花園大学人権
教育研究センター刊, 2020.4)

学園祭企画 文字を学ぶことの喜びを知る 語り・山本栄
子 聞き手・梅木真寿郎

ヒューマンJournal 232 (自由同和会中央本部刊, 202
0.3) : 500円

新しい部落史 2—中世賤民グループの一つであった穢多
村 灘本昌久

ヒューマンライツ 385 (部落解放・人権研究所刊, 20
20.4) : 500円

特集 ネット上の人権侵害—法規制と表現の自由

寺木伸明・黒川みどり『入門 被差別部落の歴史』の英
訳本“A History of Discriminated Buraku Communities
in Japan”の発刊に際して 寺木伸明

広く差別問題との対話を進めるために 黒川みどり

ヒューマンライツ 386 (部落解放・人権研究所刊, 20
20.5) : 500円

特集 「施設コンフリクト」と私たちの差別意識

部落解放運動のこれから—引き継ぎそして変革へ 6 地
域のつながりが「現在」を積み上げ、未来につなげる
濱口亜紀

ヒューマンライツ 387 (部落解放・人権研究所刊, 20
20.6) : 500円

第34回人権啓発研究集会 沖縄開催

わたしの視点—メディアの現場から 51 「BLACK IN BUR
AKU〜アフリカンアメリカン、被差別部落をゆく」制作
を通して 森下光泰

書評 部落解放・人権研究所編『人権侵害にかかわる差

水平社100年学習会から「東京水平社」研究の新たな視点 1 大串夏身氏の報告の要約

解放新聞東京版 981 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 6. 1) : 95円

大学生と学ぶ部落史・部落問題 4 双方向&考える講義 増える主体的受けとめ—全15回の講義を終えて— 吉田勉
水平社100年学習会から「東京水平社」研究の新たな視点 2 大串夏身氏の報告の要約

解放新聞東京版 982 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 6. 15) : 95円

水平社100年学習会から「東京水平社」研究の新たな視点 3 大串夏身氏の報告の要約

解放新聞広島県版 2353 (解放新聞社広島支局刊, 2020. 6. 5)

小森龍邦一『わが闘魂の半生』 1

解放新聞広島県版 2354 (解放新聞社広島支局刊, 2020. 6. 15)

小森龍邦一『わが闘魂の半生』 2

語る・かたる・トーク 301 (横浜国際人権センター刊, 2020. 3) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「モシカシテブラクノコ」 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 302 (横浜国際人権センター刊, 2020. 4) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「本当に大切なものは目に見えない」 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 303 (横浜国際人権センター刊, 2020. 5) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う 「すぐくしんどい」 吉成タダシ

かわとはきもの 191 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2020. 3)

靴の歴史散歩 136 稲川實

皮革関連統計資料

熊野 157 (紀南文化財研究会刊, 2019. 12) : 1,000円
牟婁郡西向浦被差別部落の成立と展開 藤井寿一

グローブ 101 (世界人権問題研究センター刊, 2020. 4)
歴史展示における差別表象 西山剛

柳原銀行記念資料館～崇仁地域のあゆみとともに～ 原真弓

佐賀部落解放研究所紀要 37 (佐賀部落解放研究所刊, 2020. 3)

かくす・あばく・かくさない—「被差別部落」にかかわる情報の公開をめぐる— 畑中敏之

帝国主義成立期の部落問題認識—「習慣ハ第二ノ天性ナリ」— 柳瀬劭介『社会外の社会穢多非人』にみる— 黒川みどり

老いにも初々しく そのだひさこ

第38回九州地区部落解放史研究集会報告

部落問題とは何か?—差別「排除」の根源を探る— 阿南重幸/近世の民衆と差別—佐賀の部落史史料から— 中村久子

紹介 黒川みどり・山田智『評伝 竹内好—その思想と生涯—』 田中和男

試行社通信 402 (八木晃介刊, 2020. 4)

亡き人との実存協同 7 朝田善之助さん 松井久吉さん

障害史研究 1 (障害史研究会刊, 2020. 3)

障害史研究 (Disability History Studies) のための日本古典文学研究序説 福田安典

日本における養生論の文化 瀧澤利行

<障害者>とその行方—地方(じかた)記録による実態研究の試み— 高野信治

ブックレビュー Davis, Lennard J. (ed.) (2017) The Disability Studies Reader [Fifth Edition], New York, NY: Routledge. クウィーラ, ダーヴィット=ドミニク
障害関連のデータ集 1—「耳囊」記事からの採録— 高野信治

人権教育研究 28 (花園大学人権教育研究センター刊, 2020. 3)

明治初頭における盲人の職業教育に関する一考察 島崎将臣

平安時代の障害者福祉 覚書 慎英弘

黒ぬり教科書の一例: 『高等科理科一』の場合 菅修一

「国家と教会」論・再考—天皇代替わり時代におけるキリスト教会の責任— 堀江有里

大学と人権—何のための研究か、誰のための学問か— 八木晃介

人権と部落問題 934 (部落問題研究所刊, 2020. 4) : 600円

特集 新学習指導要領の全面実施—いま求められる教育とは

文芸の散歩道 菊池寛の戯曲「特殊部落の夜」「海の勇者」—戦後の国語教科書に掲載された「海の勇者」— 桑原律

ごった煮人生をふり返って 22 続・高校生時代の生活 成澤榮壽

人権と部落問題 935 (部落問題研究所刊, 2020. 5) : 600円

特集 「表現の自由」を守れ

文芸の散歩道 夏目漱石『行人』と家制度 上 水川隆夫

紹介 部落問題研究所発行 部落の実態調査に関する図書 石倉康次

ごった煮人生をふり返って 23 早稲田大学部落問題研究会 成澤榮壽

人権と部落問題 936 (部落問題研究所刊, 2020. 6) : 600円

特集 ハンセン病家族訴訟の勝訴

文芸の散歩道 夏目漱石作『行人』と家制度 下 水川隆夫

ごった煮人生をふり返って 24 続・早稲田大学部落問題研究会 成澤榮壽

じんけん・ぶんか・まちづくり 特別号 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2020. 3)

人権文化のまちづくり講座「自分らしく生きる」報告

収集逐次刊行物目次 (2020年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

明日を拓く 122 (東日本部落解放研究所刊, 2020. 2) : 1,000円

特集1 東日本の同和教育

特集2 世代から世代へ、私の部落問題との出会いと解放運動の歩み

古文書を楽しむ 10 納経 (朱印帳) の旅 文政六癸未年六月吉祥日 諸国神社仏閣拝礼帳 (「鈴木家文書」160) 古文書を読む会

明日を拓く 123 (東日本部落解放研究所刊, 2020. 3) : 1,000円

特集 東アジアの「隣国」「隣人」—反照される「日本」「日本人」

北東アジアの和解により未完の日本国憲法を補完する—花岡、西松、三菱マテリアル、和解の経験に学ぶ— 内田雅敏/川越「唐人揃い」復活と多文化共生国際友好パレード—朝鮮通信使の精神を現代に生かす— 江藤善章/「希望のたね基金」でつかみ取った希望 梁澄子

ウィングスきょうと 157 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2020. 4)

図書情報室新刊案内

下夷美幸著『日本の家族と戸籍 なぜ「夫婦と未婚の子」単位なのか』/ケイト・マン著『ひれふせ、女たち ミソジニーの論理』

ウィングスきょうと 158 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2020. 6)

図書情報室新刊案内

メアリー・ピアード著『舌を抜かれる女たち』/乙部由子『「労働」から学ぶジェンダー論—Society5.0でのライフスタイルを考える—』

解放研究 31 (東日本部落解放研究所刊, 2020. 4) : 2,000円

近代栃木県の部落問題—解放・融和の運動— 竹末広美
19世紀の皮革国産政策と「革師」—「革師」清蔵・清作父子の企図と挫折— 浪川健治
史料紹介 浪川健治

解題「秘系由緒伝」—「乞食頭」の由緒とその論理—/翻刻「秘系由緒伝」/解題「天保凶年秋田南部日記—乞食頭丁助報告綴」/翻刻「乞食頭丁助報告綴」

「部落」呼称の定着過程と被差別民呼称 太田恭治
幕末期 長吏身分・権威主義的小頭支配 (内なる身分制) に抗する人々 松本勝

解放新聞 2950 (解放新聞社刊, 2020. 4. 15) : 115円
本の紹介 宇梶静江著『大地よ! アイヌの母神、宇梶静江自伝』 島田あけみ

解放新聞大阪版 2209 (解放新聞社大阪支局刊, 2020. 6. 25)

水平時評 あらためて考えるリパティの存在意義 赤井隆史
解放新聞京都版 1185 (解放新聞社京都支局刊, 2020. 6. 15) : 70円

「自粛生活は障がい者の生活そのもの」日本自立生活センターを取材

解放新聞東京版 977 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 4. 1) : 95円

職場で部落問題に取り組む 自分の人生観が変わった 2 中里保夫

解放新聞東京版 978 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 4. 15) : 95円

大学生と学ぶ部落史・部落問題 1 部落問題認識の情報源は小中学校の授業が80%余—やはり大切な学校の部落問題学習— 吉田勉

解放新聞東京版 979 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 5. 1) : 95円

大学生と学ぶ部落史・部落問題 2 生々しい被差別体験の衝撃 今も続く部落差別の現実—ゲストは松島幸洋さん (葛飾支部)— 吉田勉

解放新聞東京版 980 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 5. 15) : 95円

大学生と学ぶ部落史・部落問題 3 牛や豚の解体をまのあたりにして「ショッキング」「グロテスク」と「感謝」「敬意」—ゲストは高城順さん (芝浦と場)— 吉田勉

事務局よりお知らせ

◇新型コロナウイルス感染症の流行状況によっては、「差別の歴史を考える連続講座」の日程変更もしくは中止の場合があります。お手数ですが、参加希望の方は必ず連絡先を明記の上、メール・FAXにてご連絡ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032 □E-mail qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅 (京都駅より約10分) 下車 北へ徒歩5分